



令和2年度 さいたま市立土呂中学校 学校だより

# 見沼のほとり

第 7 号

令和2年10月1日

学校教育目標

主体的に生きる人間の育成 <意欲・健康・豊かな心>

悔しさは次のステージで…

校長 冨田 敦

新型コロナの夏、土呂中学校の音楽部は校内の演奏会と体育祭での演奏をもって3年生が引退しました。

高松 凜 音楽部部长「私は幼稚園の頃から音楽、特に楽器が大好きでした。小学校6年生の時に土呂中学校音楽部の演奏を聴いて、『中学校では音楽部に入ろう』と決めました。メリハリのある演奏が素敵で、とてもカッコいいと思ったからです。音楽部入部後、母がピアノをやっていることもあり、プロのサクソ演奏家のコンサートに連れて行ってもらいました。私はサクソを担当していますが、コンサートでは、『同じ楽器なのにこんなに人を感動させられるものなのか』と音楽の奥深さを感じることができました。」

「2年半、音楽部として活動してきたことを振り返ると。うれしかったことより悔しかったことの方がたくさんあったように感じます。臨時休校期間があったため、1年生の面倒を見られなかったことが心残りです。1年生にはメリハリのある演奏をしてもらいたいと願っています。私は、メリハリのある演奏とは『楽譜に合わせて強弱をつけるだけでなく、曲想に合わせて表情を変え、雰囲気を作ること』だと考えています。これを私たちの代ではできませんでした。昨年度のコククールではできていました。私たちはそういう演奏ができませんでした。それが悔しいですし、残念でもあります。やはり、コククールがなくなったことによるダメージが大きかったです。部活動が再開しても緊張感が足りず、何もかもうまくいきませんでした。私も全く吹けていませんでした。以前はできていたことができなくなっていました。もやもやしました。もどかしい気持ちになりました。」

「8月になって合奏が始まってようやく、芯がある音が出るようになり、しっかりと余韻が残る演奏ができるようになった実感が感じられるようになりました。私はうれしくなりました。9月の校内演奏会では、聴く方も演奏する方もみんなが楽しめる演奏にしたいと思っていました。演奏を終えての感想は、「楽しかった!」。みんなに聴いてもらって、みんなで吹けて、この仲間演奏ができてよかったと思っています。」

「しかし中学校では、心残りがあったまま引退になってしまいました。私は高校でも楽器を続け、自分がやりきったという実感をもてるような演奏をしたいと思っています。聴衆から、心からの拍手がもらえるような演奏をするのが夢です。」

同じように演奏に情熱をこめてきた副部長の前川さん、岩佐さんは「引退しても放課後になると音楽室に行ってしまうようになります。校内演奏会のことを聞いた時、ネガティブな自分を前向きにしたいと思いました。2年生には私たちの悔しい思いを来年のコククールで晴らしてほしい。」と後輩に思いを託します。

10月3日から始まる市新人体育大会に向けて男子ソフトテニス部 吉田 智哉 部長は「僕たちは県大会に出場し、勝ち上がっていくことが目標です。そのために難しい練習に取り組み、自宅で筋トレや体幹トレーニングをしてきました。今は、部員全員で声を出して、大会に向けて最後の練習に取り組んでいます。応援してくれるみんなのために必ず県大会出場のキップを勝ち取ってきます。」と力強く決意を述べてくれました。

バレーボール部 前原 杏菜 部長は「大会に向けて真剣に取り組み、先輩に『勝った』という報告をしたいです。練習と同じように、最後まであきらめず、全力で戦ってきます。」と表情を引き締めます。

3年生の「自分たちの分もがんばってくれ」という思いを受け継ぐ新チームが大会に臨みます。応援よろしくお願ひします。

3年生の思いがたっぷり詰まった「第25回体育祭」。「競い合うところは競い合い、楽しむところは楽しむ」体育祭になりました。生徒の意見を取り入れて工夫した「縦割りクラスごとの座席」も大いに盛り上がり、大成功でした。中面をご覧ください。紙面上でも「第25回体育祭」をお楽しみいただけます。